

「菊花の約」における義兄弟の関係 —原話「范巨卿鶏黍死生交」との比較—

台湾大学 院生 曾婧芳

一、はじめに

日本文学の中には中国文学から翻案した物語が数多くある。原作をそのまま翻訳した作品もあるが、原作の一部の設定を使って、改編した作品もよく見られる。江戸時代に、上田秋成が書いた『雨月物語』は、中国小説の翻案による怪奇譚で、日本文学史上の名作として評価されている。今日に至っても多くの学者が研究している。『雨月物語』諸篇の中の「菊花の約」は中国白話小説『古今小説』の「范巨卿鶏黍死生交」を原作として、改編された物語である。原話「范巨卿鶏黍死生交」以外にも多くの日本文学や中国文学が参考にされたと思われる。「菊花の約」と原話との主題は「信義」であることに、誰も異議はないが、作品が示す「信義」はどのような信念であるのか、また中国と日本との「信義」の違いについて、多くの学者がいろいろな意見を提出している。

「菊花の約」と原話「范巨卿鶏黍死生交」に、二人の主人公は兄弟の誓を誓って、義兄弟になった。どうして友人の関係ではなくて、義兄弟になるのか。また、義兄弟の設定は文章の中で、どのような働きがあるのか。本発表では、中国と日本の思想・文化などの相違を考慮し、多元的な視点から、「菊花の約」と「范巨卿鶏黍死生交」を比較し、二作における義兄弟の関係を探求してみたい。

二、作者の時代と作品の背景

義兄弟というのは、血縁がない人が契り、兄弟のような関係を結び、一種の擬制家族的な関係になることである。義兄弟以外、父子関係や姉妹関係などもある。中国文化における義兄弟の歴史は、何時から始まるのだろうか、その確実な時間ははっきりと分からないが、史書の記録で漢代まで遡ることができる。漢代の末期から、皇族から平民に至るまで、契りで家族になる習俗は盛んになった。中国文学にもそのような情景が多く見られる。その中で、最も有名なのは『三国演義』第一回にある「桃園の誓い」というシーンであろう。劉備・関羽・張飛三人が誓約を誓い、固い絆を持つ義兄弟となった。実際に中国の正史に、「兄弟のように¹」と書いてあるが、三人が契りによって義兄弟になったことは証明できない。しかし、三人が義兄弟になるという設定は、陰謀と戦乱が多い漢代の末期に、劉備・関羽・張飛の間の信頼を示している。『三国演義』を読んだ人は三人が義兄弟になる影響を受けて、当時の社会もその習俗が盛んとなり、更にその後の文学に大きな影響を与えたと思われる。

「范巨卿鶏黍死生交」は『後漢書』の「獨行列傳」の「范式伝」を借用している。しかし、明馮夢龍『古今小説』に見られる「范巨卿鶏黍死生交」まで、二つのテキストがある。中国東晋の干宝が著した志怪小説集である『搜神記』巻十一「山陽死友傳」、元曲《死生交范張雞黍》も同じ物語である。しかし、『後漢書』、「山陽死友傳」と《死生交范張雞黍》の范巨卿と張劭は共に太学に学習した仲が良い親友というだけであり、義兄弟の関係を結ぶことはない。また、約束を守るために、自殺する場面や、殉死の場面もない。つまり、明馮夢龍が『古今小説』を編集している際、二人の友情を背景として、新しい物語を書いた

¹ 《三国志・關羽傳》「先主與二人寢則同床，恩若兄弟。而稠人廣坐，侍立終日，隨先主周旋，不避艱險。」

といえよう。もとの物語を改編して、范巨卿と張劭は義兄弟に結ぶこととなったのである。このような変化があるのは、『三国演義』の影響を受けたのではないだろうか。馮夢龍はなぜ『後漢書』にある歴史人物を借用したのだろうか。物語の真実性を強める以外に、友人の信義は昔から重視されていたことを伝えているだろう。

日本における義兄弟の契りは何時から始まったか、確実にいえないが、武士の時代に入ると、義兄弟になることは盛んとなったことが分かる。「菊花の約」の背景は、十五世紀の戦国の騒乱期である。その時、義兄弟の誓いを結ぶことはよく知られていた。例えば、立花宗茂と小早川秀包、石田三成と直江兼続など、有名な武将がその例である。そのため、義兄弟となるのは、当時の日本社会の風習であったといえる。その慣習は、上田秋成が生活した江戸時代に入っても続いてきた。原話と同じ義兄弟の設定があるが、原話の人物の設定をそのまま借用したら、日本の社会には合わなくなった。物語を日本化するために、二人の主人公は中国の秀才と商人から、日本の儒者と武士に変えられた。原話の「范巨卿鶏黍死生交」と「菊花の約」は、義兄弟の關係に設定するのは社会背景と關係があることを推測する。

三、義兄弟になる過程の相違

「范巨卿鶏黍死生交」と「菊花の約」二作はどちらも病人を看護することより、義兄弟の契りを結ぶという結果に発展した。しかし、「菊花の約」のこの場面には原作と異なるところが明らかに見られる。原作では、張劭は同じ科挙の試験を受ける范式を助けたために、試験を受けなくなった。これに対して、「菊花の約」のほうは、このような試験を受ける者同士の設定を捨てて、左門が身分も知らない赤穴を看護することになった。

原話に、張劭はある日、店に宿をとる時、隣の部屋から人の声が聞こえた。店の小二から、一人の秀才が病に倒れたことと分かった。小二の警告を無視して、「死生育命，安有病能過人之理？吾須視之²」と言って、病人である范式を看護した。そのため試験の時間を逃してしまった。次は范式と張劭が兄弟に結ぶ場面の描写である。

比及范巨卿將息得無事了，誤了試期。范曰：「今因式病，有誤足下功名，甚不自安。」劭曰：「大丈夫以義氣為重，功名富貴，乃微末耳，已有分定。何誤之有？」范式自此與張劭情如骨肉，結為兄弟。式年長五歲，張劭拜范式為兄。³

自分のせいで、張劭が試験を受けられなくなったことで、范式は張劭にやましい気持ちを持っただろう。しかし、張劭は「大丈夫以義氣為重，功名富貴，乃微末耳，已有分定。何誤之有？」と慰めた。その後、二人は義兄弟に結んだ。次は「菊花の約」で、原話のこの場面に対応する部分である。

左門はよく友もとめたりとて、日夜交わりて物がたりすに、赤穴も諸子百家の事おろおろかたり出て、問わきまふる心愚かならず。兵機のことわりはをささしく聞えければ、

²死生命有り、安くんぞ病の能く人を過つての理有らんや。吾須らく之を視るべし

(高田衛、稲田篤信 (1985/4/30)『新註雨月物語』P136)

(日本語翻訳は高田衛、稲田篤信 (1985/4/30)『新註雨月物語』勉誠出版を参考した。以下同じ。)

³范巨卿の將に息み得て無事たらんとするに及ぶ比、試期を誤てり。范曰く、「今式の病に因りて、足下の功名を誤つ有り。甚だ自ら安んぜず」と。劭曰く、「大丈夫は義氣を以て重としと為す。功名富貴は、乃ち微末なるのみ。已に分の定まれる有れば、何の誤か有らん」と。范式此より張劭と情骨肉の如く、結びて兄弟となる。式年五歳を長じ、張劭范式を拜して兄と為す。義を結びて後、朝暮に相隨ひ、覚えずして半年なり。

(高田衛、稲田篤信 (1985/4/30)『新註雨月物語』P137)

ひとつとして相ともにたがふ心もなく、かつ感、かつよろこびて、終に兄弟の盟をなす。⁴

二つのテキストを比較すると、二人の主人公は同じ義兄弟になるが、その過程の順序は反対であることが明らかにわかる。「范巨卿鶏黍死生交」に、范式は張劭の義気に感動し、二人はすぐ義兄弟になった。義兄弟になった後、毎日一緒に生活し、覚えずして半年になった。これに対して、左門と赤穴二人は当初、友人の関係だけであったが、学問を通じて、心を通わせた。この間に、二人の感情はますます深くなり、終に義兄弟の契りを結ぶまでになる。その二つの過程を比べると、「菊花の約」のほうが自然ではないだろうか。よく考えてみると、范式と張劭と二人は付き合う時間が少ないにもかかわらず、すぐ義兄弟の契りを結んだ。一時の感激や感動に催された行為だと思われる。

「菊花の約」のほうに、前述のように、物語の背景は、十五世紀の戦国の騒乱期である。義兄弟になる人は、お互いに信頼関係で契りを結んだ一方、政治や、利益の一致のために契りを結ぶ人も数多くいた。特に、戦国時代は戦乱が多く、下剋上の時代であった。裏切りや戦争が日常的だった戦国時代の武士にとって、信頼できるパートナーは必須である。義兄弟を結ぶと、契りで結ばれる以外にも、運命共同体になって、同じ敵を倒すこととなる。しかし、利益で結ばれた人の間には、あまり信義がなく、何時か裏切られる可能性もある。左門は赤穴を看護したが、赤穴は必ず左門に感激する気持ちを持った。しかし、そのような信用が薄い社会に生きている赤穴は、人に疑いを持ち、すぐ人と義兄弟になるということはないかもしれない。彼らは友達になって、お互いを理解した後から義兄弟になるという決定をする。「菊花の約」は原話より、義兄弟になる順序は情理を兼ね備えていると思われる。

四、義兄弟の信義

「菊花の約」と「死生交」は両者とも、約束を守るために、自殺し、義兄弟に会いに行くという場面がある。どちらにも儒家思想の影が見られる。中国の場合はいうまでもなく、儒家思想にある「朋友有信」という規範を遵守している。それに対して、儒教思想は日本に伝来した時間が早いことから、儒教はもう生活に馴染んでいるといえるだろう。特に江戸時代には、幕府の提唱で、儒教が更に盛んになった。「信」と「義」は儒家の規範の中で、「忠」、「孝」の後に続く道德である。二作の中心思想は「信義」であることに議論はないが、どちらが真の信義であるかという「信義論争」はよく議論されている問題である。「死生交」が再会の約束を范式本人の失念により、不可能になったのを「菊花の約」は幽閉のために果たせないという設定に変わっている。即ち、「死生交」では本来、范式は生きて会うことが出来るが、私的なことによりその日を忘れた。逆に、「菊花の約」では約束を忘れたが、監禁されていたから、個人的理由ではない。それゆえに、日本の学者にとって、「菊花の約」の信義は「死生交」より崇高である。その点について、中田妙葉氏は前述の論文で以下のように主張している。

范式の約束を忘れた態度を、信頼を欠く設定だと見えるかもしれない。(中略) 処罰のために幽閉されていた宗右衛門の設定は、生きそこを出られるかも分からない身であり、約束という束縛がなかったとしても、死を選ぶほか自由の身となる道はないようである。それに対して、范式は生きて再会することが可能である身で、敢えて死を選んだ。⁵

范式は期日を忘れたというのは日常によく起る事件である。期日を延ばすことは可能であった。しかし、最後に自殺を選び、約束を守らなければならないという思いが、范式の

⁴高田衛、稲田篤信 (1985/4/30)『新註雨月物語』勉誠出版 p 21

⁵ 中田妙葉 (2006)『高崎経済大学論集 第 48 巻 第 4 号』「菊花の約」における「信義」について—中国白話小説「范巨卿鶏黍死生交」との関係による一考察— p 133

信義を表現しているのではないだろうか。中田妙葉氏は、また次のように指摘している。

原点では約束の日を忘れたという設定にし、日常の死を取り入れることで、范式的信義を強調したのだろう。それに対し、秋成は約束の期日を忘れることは人格上信頼を欠くとみて、宗右衛門を幽閉するという処置を行ったのではないだろうか。いわばこの改編部分は、期日を忘れることは信頼という意味で余り損失を見ず、結果的処理を重視する中国的な価値観と、期日を忘れるというところすでに信頼に欠けると見なす日本の価値観が、顕在化している箇所ではないか⁶。

彼らの自殺する理由は全く異なる。范式は商売のために、約束の日を忘れてしまった。思い出した時にはもう遅かったのである。中国人の商人に対する「重利軽離別」という印象が思い出される。しかし、良い商人は「利」より、「信義」のほうを重視する。だから、范式は「信義」を守り、約束に反しないように、自刎した心情も理解できる。赤穴は何時でも約束を覚えているが、囚われていることから、勿論約束の場所へは行けない。ほかの方法もないので、自殺を選んだ。「死生交」と「菊花の約」との「信義論争」の中で、どちらのほうが「真の信義」なのかという問題には、正確な答えがないと思われる。解釈や立場の違いにより、見えるものも違うだろう。どのような主張にも、それを支える根拠が存在している。中国と日本との国情や価値観は異なることから、優劣をつけることはできない。

上述の信義は常に討論されたテーマである。しかし、この「信義」は「朋友有信」の精神である。もし、作者は友人の信義を伝えたいなら、なぜ義兄弟の設定にしたらだろうか。ここには、友人の信義以外に、他の精神があるかどうか、考察してみたい。

二人の主人公は義兄弟になることが、二人に関することだけではない。原話に、范式が張劭に、以下のように言っていた。

范式曰：「吾幼亡父母，屈在商賈。經書雖則留心，親為妻子所累。幸賢弟有老母在堂，汝母即吾母也。來年今日，必到賢弟家中，登堂拜母，以表通家之誼。」⁷

これに対応する「菊花の約」の部分は、

「吾父母に離れまいらせていとも久し。賢弟が老母は即吾母なれば、あらたに拝みてまつらんことを願ふ。老母あはれみて、をさなき心を肯け給はんや。」左門歎びに堪へず、「母なる者常に我孤独を憂ふ。信ある言を告げなば齢も延びなんに」と、伴ひて家に帰る。(略) 赤穴拝していふ、「大丈夫は義を重しとす。功名富貴はいふに足らず。吾いま母公の慈愛をかうむり、賢弟の敬を納むる。何の望かこれに過ぐべきと」よろこびうれしみつつ、又日来をとどまりける。

この二つの段落から見ると、范式と赤穴は新しい家に属して、義兄弟の母を自分の母を見なす。その血縁がない母親にも「孝」という道德の義務があるのではないか。そのため、その約束は義兄弟との約束だけではなくて、母親との約束である。自殺することより、約束を守るのは、「信」の実践だけではなく、「孝」の道德も遵守した。ところが、范式の魂

⁶中田妙葉 (2006)『高崎経済大学論集 第48巻 第4号』「『菊花の約』における「信義」について—中国白話小説「范巨卿鶏黍死生交」との関係による—考察—」p133

⁷范式曰く、「吾幼にして父母を亡ひ、屈して商賈に在り。經書心を留むと雖則も、妻子の為に累はさるるを奈せん。幸ひ賢弟に老母の堂に在ます有り。汝の母は即ち吾が母なり。來年の今日、必ず賢弟の家中に至りて、堂に登りて母を拝し、以て通家の誼を表さん」

(高田衛、稲田篤信 (1985/4/30)『新註雨月物語』P137)

が張劭の家に行った時に、

劭曰：「兄意莫不怪老母並弟不曾遠接，不肯食之？容請母出與同伏罪。」范搖手止之。

劭曰：「喚舍弟拜兄，若何？」范亦搖手而止之。⁸

張劭は母を呼んで、范式を迎えに行かなかったことに罪を謝るつもりである。母親より、范式のほうを重視する。「孝道」を唱えた儒学を勉強した人にとって、筋道が立たないと思う。しかし、真の家族を超えたこの感情によって、後の母親と弟を捨てて、殉死する結末になったことも意外な展開ではないと思われる。

五、殉死と復讐

「死生交」の最後で、張劭は母親と弟に、范式を弔いに行くと言った。また、弟に母親のことを頼み、涙を流して、家族と別れた。この時、彼はもう自刎することを決めていた。范式の柩を見た時、「兄為弟亡，豈能獨生耶？囊中已具棺槨之費，願嫂垂憐，不棄鄙賤，將劭葬于兄側，平生之大幸也。⁹」と言った。范式の妻に止められても、佩刀を取って、自刎して死んだ。范式と張劭との深い感情が感じられる。この感情は母親までも捨てることができる感情である。張劭の自刎した行為は読者を感動させたが、中国の倫理観では、母親を残して死ぬことは、たとえ信義を守っても、不孝者と非難されることもある。

前述の「桃園の誓い」で劉備・関羽・張飛の三人は、「同日に生まれることを適わないが、同日に死ぬように願う」という誓いをたてた。ここから見ると、義兄弟の関係は友情の範囲を超えて、命までも捨てられる決心があることが理解できる。中国に、范謝將軍という二人の物語も同じ結末である。以下は物語の筋である。

昔、謝必安と范無救という二人がいた。彼らは仲の良い義兄弟であった。ある日、二人は橋の下で会うことを約束した。范無救が着いた時、強い雨が降ったが、彼はずっと橋の下で謝必安を待っていた。謝必安が着いた時、范無救はすでに大水で溺死していた。謝必安はこのことを知った後、自縊した。玉皇大帝は二人の信義の深いことに感動して、冥界の神に封じた。¹⁰

これは単なる伝説だが、中国人は信義、特に義兄弟の間に、命を越える「信義」を重視することが理解できる。信義がある人の行為は世に顕彰して、範として後世まで伝えようとし、後人に褒めらるるのである。

しかし、「信義」以外にも、他の要素が見受けられる。張劭が殉死したことが、中国の「士為知己者死¹¹」の精神を表す。「知己者」は自分を了解する人、また信頼する人である。自分を理解する知音はあまりあわないから、恩を返すために、死ぬまでもできる。范式は約束を守るために、自殺した。世の中に、范式のような信義がある人は珍しかった。その信義に報えるのは、死がけである。その故、張劭は殉死を選んだと思われる。

もし「菊花の約」は「死生交」のあらすじに従えば、左門は張邵のように、自刎を選ぶ

⁸ 劭曰く、「兄の意はおそらくは老母並びに弟の曾て遠くより接へざるを怪しみて、肯て之を食はざらん。母に出づるを請ひて与に同じく罪に伏するを容れよ」と。范手を揺りて之を止む。劭曰く、「舍弟を喚びて兄に拝せしむるは、若何」と。范亦た手を揺りて之を止む。

⁹ 兄弟の為に亡す。豈に能く独り生きんや。囊中已に棺槨の費を具ぶ。願はくは嫂憐を垂れ、鄙棄を棄てず、邵を將て兄の側に葬らば、平生の大幸なり。

(高田衛、稲田篤信 (1985/4/30) 『新註雨月物語』 P143)

¹⁰ 王詩琅(1999/02) 『台灣民間故事』 玉山社出版事業股份有限公司 P114-117

¹¹ 《戰國策・趙策一》：『士為知己者死，女為悅己者容，吾其報知氏之讎矣。』

はずだった。しかし、「菊花の約」は「死生交」から離れて、復讐譚の結末を展開した。左門は家を出る時、母親に「生は浮きたる漚のごとく、旦にゆふべに定めがたくとも、やがて帰りまいるべし」と言って、涙を拭いて、家を出た。彼は復讐にいく時はもう帰ることができないという殉死の気持ちを持っていただろう。左門は復讐のために、赤穴の従兄弟である丹治を殺した。最後に兄弟の信義に感動した尼子は、左門を逃した。この後の左門はどうなるのか、書かれてはいないが、おそらく故郷へ帰って、もとの生活に戻っているだろう。左門は死の覚悟をしていたが、この覚悟と張邵のとは異なると思われる。張邵には選択肢があった。つまり、張邵は自刎という選択をしないなら、悲劇のような結果にならないだろう。これに対して、左門は復讐を決めた時はもう死亡するという結果が見られるが、彼が死ぬか死なないかという決定権は尼子が持っている。尼子の赦しで、左門は死から逃れた。無事故郷へ帰って、母親を養いつつ、もとの生活を続けていった。読者の期待にも応えたのである。

日本には友人や家族のため、仇を討って復讐する行為は昔から存在する。中世から、武士は君主のために、復讐することもよく見られる。また家の名誉のため、家族が殺されたため等、様々な理由で敵討することが多い。それゆえ、左門は丹治を仇討ちすることも当然であるといえる。左門は丹治を殺す前に、昔魏の公叔座のことを述べて、丹治の不義を指摘した。これに対して、左門は「兄長赤穴は一生を信義の為に終わる」「義士なり」という言葉で、赤穴が高潔な信義の士と褒めた。不義の丹治を殺すのは、正義なのである。そのため、左門は人々に殺人犯と呼ばれず、逆に信義がある人である。また、読者も彼の行動の理由を理解でき、殺された丹治を不義の人であると批判した。そして、赤穴と丹治とは従兄弟の関係で、血縁がある兄弟といえよう。しかし、従兄弟より、血縁がない義兄弟である左門のほうが信義がある。左門と丹治の行為を比較すると、主題の「信義」が一層強められる。原話より、読者に印象が残ると思われる。

六、結論

「菊花の約」は中国の「范巨卿鶏黍死生交」の改作だが、評価の高い作品である。小椋嶺一氏は以下のように評価している。

「菊花の約」は、翻案小説としての性格を濃厚に示し、その粉本である『死生交』の骨格にその大半を負っている。しかし、秋成の「菊花の約」はそういった『死生交』に存在する中国的異臭を一切取り除き、日本的風土の中に融和させる¹²

上田秋成は中国の小説を改編して、日本の要素を物語に入れ、日本人の性格や社会背景に合う作品を作り、後世の作品にも大きな影響をあたえた。これは『雨月物語』の魅力ではないだろうか。

今回の発表のテーマである義兄弟は、中日双方で見られる習俗である。同じ血縁がない人が契り、擬制家族のような関係となるが、異なる社会背景によると、義兄弟の意味も異なるところがある。日本「菊花の約」は中国の文学を基として、同じ義兄弟の設定があるが、上田秋成は自分の方法で改編して、日本の社会に合わせた。二人の主人公の設定や、結局的の違いなどいろいろなところから、上田秋成が「菊花の約」を書いた時の苦心が見られる。特に、「菊花の約」の最後に、原話がない従兄弟がいる。血縁がある従兄弟と血縁がない義兄弟の行為を比べると、原話よりその信義の差が区別できると思われる。

テキスト

¹² 小椋嶺一（2002/06/03）『秋成と宣長 近世文学思考論序説』P220

第 8 回国際日本学コンソーシアム「食・もてなし・家族 II」
日本文学部会 2013 年 12 月 17 日 於：お茶の水女子大学

1. 上田秋成 (1976) 『雨月物語』 勉誠出版
2. 高田衛、稲田篤信 (1985/4/30) 『大学古典叢書 1 新註雨月物語』 勉誠出版
3. 馮夢龍 (2001) 『喻世明言』 桂冠出版社

参考資料(出版年代より)

1. 重友毅 (1943/05/20) 『秋成』 日本評論社
2. 重友毅 (1946/11/05) 『雨月物語の研究』 大八洲出版株式会社
3. 王詩琅 (1999/02) 『台灣民間故事』 玉山社出版事業股份有限公司 P114-117
4. 鈴木敏也 (2003/03/01) 『秋成研究資料集成 第 3 巻 雨月物語新釈』 株式会社クレス出版
5. 氏家幹人 (2007/02/25) 『かたき討ち』 中央公論新社
6. 井上泰至 (2009/05/10) 『雨月物語の世界—上田秋成の怪異の正体』 角川学芸出版

論文・雑誌

1. 趙姫玉 (2002) 『『雨月物語』の研究—中日比較の視点から』 お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 博士論文
- 中田妙葉 (2006) 『高崎経済大学論集 第 48 巻 第 4 号』 「菊花の約」における「信義」について—中国白話小説「范巨卿鶏黍死生交」との関係による一考察—